

広瀬川に鮭をもどす会の歩み

- 1996 年 会結成。梁川小で初めて稚魚の放流
- 1999 年 「特別追補許可」を受ける
- 2000 年 初放流のサケが遡上。霊山と川俣にふ化場を建設。遡上したサケから受精卵を作り毎年放流
- 2002 年 「サケまつり」を初開催
- 2006 年 福島民友新聞社「みんゆう環境賞」受賞、福島民報社「阿武隈川清流大賞優秀賞」受賞（2009年、2010年にも受賞）
- 2021 年 「第75回愛鳥週間野生生物保護功労者表彰」受賞



掛田小で表彰状を伝達された二瓶富章さん（左）と菊田善雄さん（右）（2021年5月）

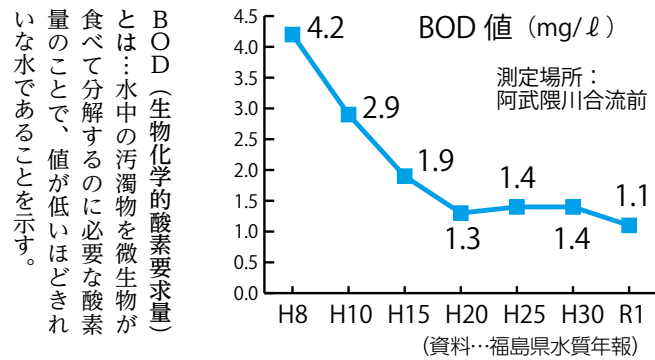
毎年の活動内容

- 10月初旬 河川の草刈りなどを実施
- 10月下旬～サケの遡上状況を確認
受精卵を作る
- 12月上旬 誕生間近の受精卵を小学校に届け、サケの習性や飼育方法について指導（定期的に訪問し生育状況を確認）
- 12月下旬～ふ化場の稚魚の育成
- 1月下旬～ 稚魚の放流体験
- 年中 広瀬川の巡視



（上）霊山のふ化場付近を除草する会員
（下）稚魚にエサをあげる二瓶さん。8時11時15時の1日3回エサをやり、夕方には毎日水槽を掃除している

も どす会の活動と時を同じくして、広瀬川流域4町で作る「広瀬川汚染防止懇談会」では、下水道の整備や合併処理浄化槽の普及、生活排水の削減などに取り組み、地域全体の課題として水質改善と環境保全に力を尽くしました。水環境の汚染度合をみるBODの値は、もどす会が活動を始めた頃と比べ、4・2から1・1（グラフ参照）になりました。人々の努力が実り、広瀬川は着実に「きれいな川」へと変わってきたのです。



震 災や台風など、度重なる災害でサケの放流は度々中断の危機にさらされてきました。令和元年東日本台風では、土砂崩れで霊山のふ化場に水を引

度重なる困難 それでも諦めなかった 諦めたくなかった 27 年間

けなくなりました。もうダメか：と思ったところ、何とか阿武隈川漁協のふ化場を借りられることになりました。胸をなで下ろしたのも束の間で、毎年200～300匹ほど帰ってきていたサケが、ここ2、3年、数が減っているといいます。今シーズンは毎日何時間も粘って、捕獲できたのはわずか15匹。メスは4匹ほど、卵は約8000個でした。例年50匹～60匹ほど捕獲し、2万～3万もの稚魚を放流してきたことを考えるとその差は歴然です。

「太平洋の海水温が高くて、サケが戻れなくなった。浜通りもみんな大打撃だよ。サケが川を泳ぐ姿はもう見られなくなるのかもしれない。」ため息まじりに二瓶さんはこぼします。苦労が重なっても、なぜボランティアでそこまで続けるのか。二瓶さんの答えはシンプルです。「やってくられて学校から頼まれるからだよ。稚魚の成長を見守ることで、子どもたちが環境に興味を持ってくれることが一番勉強になると思うんだ。」



特集 次世代に渡す、命のバトン ～広瀬川のサケを守る人と、受け継がれる想い～

広瀬川は、サケが再び戻ってくる川になったー
サケが全く遡上しなかった1996年から27年間、子どもたちの環境教育のため、サケのふ化と稚魚の放流を続けてきた「広瀬川に鮭をもどす会」の想いに迫る。

広 瀬川に鮭をもどす会（以下「もどす会」）会長の二瓶富章さんがサケの放流を始めたのは1996年。当時梁川小では、児童への環境教育の一環としてサケの稚魚を広瀬川に放流したいと考えていました。しかし、サケ捕りをする人がいないため、許可されなかったと知った二瓶さんは一肌ぬがうと決心します。「昔は遊びといえば魚捕り。中学卒業してサケ捕りしてる人にくっ付いて網の作り方、捕り方、育て方も全部覚えた。広瀬川が汚れていたのは知ってたし、霊山から妻をもらったから恩返しのため。」と二瓶さん。県と交渉し、放流を4年続けたら許可が出ることになりました。もどす会を立ち上げ、木戸川漁協から稚魚を買い付け、子どもたちのために全てボランティアで放流を始めたのです。



成長したサケと再会。より身近に感じてもらうと遡上する秋にサケまつりを開催していた。

放 流は広瀬川流域の小学校に広まり、多い時には梁川、霊山、月館、川俣の4町、11校でサケの受精卵の観察と稚魚の放流をしていました。サケが戻る環境を守るため、河川敷の草刈りやゴミ拾いにも力を入れました。サケが戻ったことは地域にも影響を与えました。二瓶さんは「橋の上からサケの遡上を楽しむに眺める人が増えた。農作物の残りを川に捨てる人もぐっと減ったね。」と話します。サケが戻る広瀬川を取り戻したことは、地域の誇りや喜びにつながっていきました。

※県内河川は全てサケを捕ることは法律で禁止されていて、増殖または試験研究などのために許可を受けた者に限られる。二瓶さんはふ化場を作り増殖させる体制を整えて「特別追補許可」を得た。

子どもたちに伝えたい

サケが戻り、高まる機運

大きくなって、戻ってきてねー



心を込めて…広瀬川へ

1 月26日、学校の水槽で育てているサケとは別に、二瓶さんが育てた稚魚約7000匹を広瀬川に放流しました。

「4年後に戻って来るサケは0・3パーセント、21匹くらいです。長く厳しい旅を終えて、また戻って来られるよう、祈りながら放流してください。」二瓶さんは児童に伝えました。

「大きくなってね。」「また会おうね。」自分たちが放流したサケには、全部戻ってきてほしい。4年後の再会を楽しみに、優しくサケを送り出しました。

Voice

「元気に戻ってきてね」



掛田小2年 渡邊 美海 さん

サケは元気にいっぱい泳いで行きました。「また元気に戻ってきてね。」と声をかけてあげました。

Voice

「4年間僕もがんばる」



掛田小2年 橘内 俊也 さん

毎日観察するのが楽しいです。サケががんばって戻ってくるまで、僕は少し苦手なかけ算をがんばります。

受け継がれる想い

「瓶さんに来年以降の予定を聞くと、わずかに表情が曇りました。「もう高齢だし、毎年終わりがなと考える。サケが戻らなければできないし。ただ、サケがいなくなった時、川への関心が薄れるのが一番怖い。ゴミだらけで魚がいなかったあの川にはもう戻したくないから。」

「いつまでもサケが戻る自慢の川であってほしい。川を守るために自分たちで考えた対策をやり始めた児童たちもその思いは一緒です。サケが次世代へと命をつなぐように、もどす会の想いは児童たちに受け継がれています。」



(上) 6～7センチほどに成長した稚魚。学校の稚魚よりも大きい
(下) 「戻ってくる頃にはみんなは6年生だ」児童と話す二瓶さん



サケの放流を終えホッと一息。左から(もどす会) 菊田善雄さん、二瓶富草さん、(霊山協力会) 佐藤勝夫さん

サケの卵、届いた！

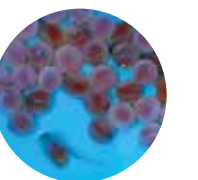
12 月初旬、掛田小と石田小に受精卵が届けられました。掛田小では毎年2年生がサケの観察をしています。二瓶さんはサケの一生や回遊ルートを見聞に教え、「サケは自分が生まれた川の匂いを覚えていて、北の海をまわって、4年後に広瀬川に戻ってきます。川が汚れるとサケが戻りません。皆さんもきれいにしましょう。」と呼び



サケの一生を子どもたちに説明する二瓶さん

受精卵が届いた日から、児童たちは成長の様子をタブレットで撮影し、小学校のホームページで配信し始めました。二瓶さんはホームページを眺めては、「しっかり観察してる。感心だ。」と目を細め、児童たちの活動を見守りました。

かけました。児童たちは「海では何を食べますか？」どのくらい大きくなって戻ってきますか？」と興味津々。60、70センチになると聞き「えーっ！」と歓声を上げました。



リトマス試験紙を使って、広瀬川がきれいな水質であることを確認した

「ジュースは飲み切る」「食べ残しをなくす」「皿の汚れを拭く」「石けんなどを使いすぎない」「水切りを調べて発表しました。」

サケが戻るためにできる事

サケの世話をしながら、広瀬川を守る方法も考え始めた児童たち。生活科の時間に「広瀬川を守るためにできること」を調べて発表しました。

ネットを使う」などの対策がありました。



掛田小学校ホームページからサケの観察日記 (抜粋)



2日目

おなかについている赤いのは「えいよう」だと教えてもらいました。



20日目

水がにごっていました。みんなでフィルターをきれいにあらいました。



47日目

下の方でまとまとうごいていました。おなかのえいようは、まだあります。



61日目

はじめてえさをあげ、3ぴきがえさを食べました。「食べすぎちゃだめだよ。」と声をかけました。

観察日記をみる
掛田小ホームページはこちら



Voice

「命を守る責任感が芽生えた」



掛田小2年担任 後藤 良子 先生

今までは生き物に対し「かわいい」というだけでしたが、サケの世話をしているうちに、命を預かった責任感が子どもたちに芽生えました。広瀬川はサケが帰って来る川だと知ったこと、自然の素晴らしさに触れたことで、故郷を大切にする気持ちや誇りを持ってほしいと思います。